〈研究ノート〉

タイにおける媽祖信仰

―バンコクの媽祖廟調査（2022年8月）報告―

張　　雯　玥

はじめに

「媽祖」信仰は、一つの伝統文化として存在している。そして、その文化そのものの成長と発展に伴う長い歴史的経過を経て、「媽祖」信仰は、華夏文明圏とつながる重要な絆を形成するファクターともなっている。特に海外へ移住した「華人華僑」の共同感情の育成や精神方面での文化的昇華を促し、国籍の異なる世界各地の華人華僑の間に、共通の精神的な帰属感を生み出している。

この文化的属性を基盤に媽祖信仰が広がったインドネシア、韓国、インドなどでは、中国の貿易を介したいわゆる「海のシルクロード」が形成されている。これらの国や地域には、多くの華人華僑が集まっているが、媽祖に対する崇拝と信仰が彼らの共通の精神的な絆となっているのである。共通の文化・思想の影響により、文化認知による理解が深まることは、多様なその貿易活動にもはっきり表れている。

「媽祖」は、2009年に国連「人類の無形文化遺産の代表的な一覧」に登録され、中国初の信俗類の世界遺産となった[1]。そのため媽祖研究は中国文

1　https://www.ihchina.cn/mazuxinsu.html（最終閲覧日：2022/10/21）

化的視点だけではなく、多文化的な視点による研究であることを求められ、媽祖信仰のグローバル化と国際関係そのものとの相関を考えなければならない。

例えば、タイには華僑華人が約700万人おりタイの総人口の11％を占めている（2016年統計）。そのうち約70％の華人華僑の原籍は広東省である。タイの華人華僑は主にバンコク、チェンマイなどの大都市に集中し、バンコクが最多である（赵 2017：62）。タイは歴史的にも長期に渡って中華文化の影響を受けてきたため、生活様式や社会文化には中華的雰囲気が濃厚である。そのため華人華僑は現地の生活に溶け込みやすく、タイ社会においても影響力のある経済的、政治的、文化的有力者も少なくない。

19世紀初期、華人華僑の東南アジア進出に伴い、特に福建人や広東人の間でタイに移住する風潮が現れた。媽祖信仰は中国大陸から東南アジア地域に大規模に進出し、東南アジア地域の華人華僑の主要信仰の一つとなった。船に乗ってタイに到着した華人は媽祖を崇拝し、媽祖文化はタイでも相当な影響力を持ち、タイの信仰体系にも溶け込んでいった。

本稿は、2022年 8 月、バンコク市内の媽祖廟の現状とその特徴、媽祖信仰がタイに伝播し、変容していった過程の一端を明らかにするため、バンコク市内の四丕耶七聖媽廟と本頭媽廟および Mazu Shrine を対象に行われた現地調査の記録である。この記録では、廟関係者に廟の歴史、建築、運営方式などについて聞き取りを行い、媽祖廟を訪れる参拝者にもインタビュー取材をした上で、関連文献や資料も現地において収集したものを纏められている。

一、先行研究

媽祖信仰に関する研究は20世紀に入ってから盛んに行われている。松尾（2021）は、中世後期から近世期のヨーロッパの大航海時代に南シナ海を越え、あるいは太平洋の大海を渡って東アジアにまで到達したヨーロッ

パの海商や彼らと商売において競合した中国の海商が、航海の安全を祈願する女神に焦点を当てて考察している。彼は、東洋と西洋との出会いの中で、中国の航海の安全を約束する女神である「観音」がヨーロッパ人の航海神ともなった「マリア」の影響を受けて像容を変化させ、さらには「媽祖」の像容にも変化をもたらしたこと、またそれが日本ではキリスト教が禁制となる中で中国より輸入されたことにより潜伏キリシタンの祈りの聖像として珍重されたことの経緯について述べる一方で、媽祖の航海女神としての側面にはあまり言及しておらず、媽祖が大航海時代にどのような役割を果たしたのか、漁民の心の中でどのようにイメージされ、どのように国境を越えて海外に広まったのかについては、明らかにはしていない（松尾 2021：411–452）。

菊地（2020）は、「東アジアにおける女神信仰および当地域の信仰圏の研究に新たな扉を開く提言と言えよう。そしてこれはまた民間宗教を媒介とした「相互に影響し合うアジア（inter-connected Asia）」という図式を提示し、民間信仰と宗教との融合という発想に基づいて、媽祖信仰が中国大陸から日本および朝鮮半島に伝播した歴史を考察し、宗教史の文脈から見れば、元朝の媽祖崇拝が仏教の観音信仰と合併したことには、民間への「浸透と異文化世界への伝播において大きな意義があった」（菊地 2020：29–56）、という。

中村（2021）によれば、航海神として信仰されていた媽祖が内陸部へと伝播するなかで、どのような信仰変容の流れがあったか、とりわけ内陸地域へと移動・移住した当時の民衆が、どのような願望をもっていたかを把握することができ、媽祖は「ナショナルアイデンティティ構築のための有用な文化資源としても、中国の各沿海・内陸地域に空間的に偏在しているかのように表象されてきた」（中村 2021：325–338）。したがって、中国における媽祖信仰の多様性を分析する上で重要な研究である。

段立生『泰国通史』（段 2014）は、タイという古くからの文明を持つ国の歴史、すなわち先史時代、前スコータイ王朝、スコータイ王朝、アユタ

ヤ王朝、トンブリー王朝からバンコク王朝までの歴史およびラーマ5世以降の、タイが世界に溶け込み現代化していく発展過程を記している。

東南アジアの媽祖信仰に関する日本語文献は比較的少なく、本稿の参考文献は中国語文献多くを引用している。

二、媽祖信仰について

媽祖は古来漁師が海に出る前に航海安全を祈願する女神である。媽祖という名前のほかに、娘媽、天妃、天妃娘娘、天后、天上聖母などの称号をもつ。宋代に実在した、中国福建省閩海都巡検の官吏林惟悳の娘「林默」が神様になったといわれている。林默は、宋建隆元年（960年）旧暦3月23日に誕生し、生まれた時は泣かなかったので「默」という名を付けられたという。文献では「默娘」と表記されるが、「娘」の字は昔の単名の女子に対する通称であるため、媽祖の本名は「林默」であったはずである[2]。

南宋から清代にかけての歴史文献のほとんどにおいて、「林默、福建省湄洲島に生まれ、幼い頃から異能があった。地元で有名な巫女（魔女）」であると指摘されている。また、媽祖は仏教、道教、儒教の特徴があるとされる。子どもの頃から禅宗の信者で、5歳で『観音経』を諳んじ、観世音菩薩が優鉢羅花（青蓮華）を持つ夢を見て、10歳の時には道教者の指導で『玄微秘法』を伝授され、道教の研究を始め、16歳の時、友人たちと井戸を鏡にしていると、突然井戸の中から神様が現れ、他の人は驚いて逃げていったが、彼女は神様を見ると俄にひざまずいて祈ったので、神様は彼女が非常に敬虔な様子であることを見て、手の中の銅製の札を媽祖に授けると、それから法力を得て巫覡になり通霊となって、困っている人々を救うことができるようになって、「数々の奇跡を起し、「通賢霊女」と崇

2　https://www.setn.com/News.aspx?NewsID=626375（最終閲覧日：2022/10/22）

められるようになった」という（髙橋 2009）。28歳の時に、船乗りを救助する中、彼女も遭難し亡くなってしまう。

媽祖文献の中で史上最古のものは、南宋紹興間進士、廖鵬飛が1150年に書いた『聖墩祖廟再建順済廟記』である。そこには媽祖について、「姓林氏，湄洲島人。初，以巫祝為事，能預知人禍福，死後，眾為廟」（姓は林氏、湄洲島出身、最初に巫女として人の未来を予知することができたため、媽祖が死んだ後に、人々は媽祖を記念するために廟を建てた）と記されているという（蒋 2007）。媽祖は巫女で、庶民に尽くしたため死後祀られたとし、媽祖の道徳と博愛について記すことで背後にある中華文化の優れた伝統をも示しているという。

宋宣和 5 年、路允迪は皇帝に命令され高麗に出使する途中、天候急変し海上には暴風が吹き、 8 隻の船の内 7 隻が沈没したが、路允迪の乗った船だけは媽祖を祀っていたために無事だった（王 2020）。路允迪が媽祖を救難の神として皇帝に啓奏したことで、媽祖は初めて朝廷に知られ、「順済」の額を賜り、以来歴代皇帝から度重なる封号を受けるようになる。宋徽宗宣和 5 年から清道光止までに、皇帝による顕彰は16回に及び、媽祖信仰は全国に広まるようになった（鄭 2020）。そして媽祖は公式に認められた航海神になったのである。これは媽祖の航海神としての誕生を示している。

元代は、媽祖信仰が中国沿海部のほとんどの地域に伝播される重要な時期である。1267年、フビライは北京に遷都し、北京は当時全国の政治と文化の中心となった。人口が急速に増加した北京の商業と物流は盛んになり、媽祖信仰は福建省から中国の内陸の天津まで伝播することになった（鄭 2020）。当時、媽祖は航海神として中国東南部から北京への食糧を運送する船ですでに祀られていた。海難事故が大幅に減少したため、媽祖の加護に感謝し、世祖クビライは媽祖を「護国明著霊恵協正善慶顕済天妃」に封号した（矢澤 2014）。柳貫（元）は『敕賜天妃廟新祭器記』で「海神之貴祀曰天妃、天妃有事於海者之司命也」と記し（蒋 2007：15）、媽祖を

航海神の中で最も重要な神とし、媽祖の女神としての身分を肯定した。モンゴル政権の強力な支援により、媽祖は元代で最大の影響力を持つ航海神となった。これは元代の媽祖の「官の信仰」としての側面を表す（矢澤 2014）。

明代になると、さらに政治的要素がいっそう際立つようになった。明朝は外交関係を進展させるため、海外に宦官鄭和を派遣した。1405年から1431年まで、皇帝の命令を受け、鄭和は百隻の大艦隊と数万人を引き連れ、全七回にわたって東南アジアからインド洋、アフリカ東岸方面に遠征したが、その際「船に媽祖を奉安し、その加護を得たことをたびたび奏上したという。このため、媽祖信仰は世界でますます広まっていった」（胡 2015： 6 ）。鄭和は、航海の業績を朝廷と媽祖に捧げ、鄭和の書いた『天妃之神靈應記』では、「而我之雲帆高張、晝夜星馳、渉彼狂瀾、若履通衢者、誠荷朝廷威福之致、尤頼天妃之神護佑之德也」（蒋 2007：45）と記されている。鄭和艦隊は航海中危機に遭遇したが、彼は朝廷の威福と媽祖の加護で「雲帆高張、晝夜星馳」することができたと考えていたのである。鄭和艦隊には媽祖を信仰する信者が多かったので、それは危機に遭遇した際に最初に助けを求める最も信頼できる神であった。そして、永楽帝は媽祖を「護国庇民妙霊昭応弘仁普済天妃」（矢澤 2014）として封じ、媽祖は国家祭祀の対象となり影響力はさらに広がった。

清朝になってからも、中国とシャム（タイ）は依然として友好関係を維持していた。しかし、清朝は外国朝貢使節団の人数を限定していたため、この時期のシャム（タイ）の中国使節団の数は明代より少なかった。すべての外国使節団の中で、シャム（タイ）使節団は清政府に最も人気があり、同時に最も多くの特権と優遇を与えられていた。康熙帝が東南アジアへの航行禁止令を施行している間も、中国とシャムの民間貿易は通常通り行われていた。

三、華人華僑のタイへの移住とその背景

媽祖信仰は、歴史の中で海運港都市を象徴する文化的繁栄の代表的なシンボルになった。媽祖の加護のもとに沿岸貿易が安定し、貿易港都市の収益性が確保された。上海社会科学院媽祖文化研究中心の王宏剛主任は、「中国文化の基本は平和、和睦、調和であり、媽祖女神はこのような文化精神と合致している。危険な海洋生活の中では、母親の強さ・忍耐力・深い愛情を寓意する文化象徴が必要だ。したがって、清朝中期以降、庶民は媽祖を「天上聖母」として慕い、故郷から離れた旅人は媽祖を故郷の神聖なシンボルとなっている[3]」と述べている。

海外移民の華人華僑は、船に乗り航海の無事を祈ったため、媽祖を船で祭祀し、無事上陸すると、媽祖に感謝し媽祖廟を建立して媽祖を祭祀し、海外で未知の土地での生活や発展を祈願した。

媽祖信仰は、華人華僑の海外への移民にともなって世界各地に広がっており、まず東南アジアでは、マレーシア、シンガポール、タイ、インドネシア、ベトナム、フィリピンなどに伝播していた。その後、アメリカ、カナダ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン、ニュージーランド、オーストラリアなどの諸国にも広がっている。

タイ、旧称シャムは、インドシナ半島の中央に位置し、南はマレー半島に接し、東、北、西はカンボジア、ラオス、ミャンマーとそれぞれ隣接している。1238年にスコータイにタイ族による最初の王朝が開かれて以来（1238–1419）、アユタヤ王朝（1350–1767）、トンブリー王朝（1767–1782）、バンコク王朝（1782-）の四王朝の統治を経ている。シャムの史書によると、アユタヤ王朝時代の都には華人華僑の居住区域が 6 カ所あった（李 2015：273）。

アユタヤ王朝は中国明朝と親交があり、統計によると1368年から1644

3　http://www.ptwhw.com/?post=13842（最終閲覧日：2022/10/22）

年にかけてシャム使節は102回中国を訪れており、中国明朝は19回シャム（タイ）を訪問する使節を派遣している（邹 1985）。明代には厳しい「海禁政策」が実行され、合法的な貿易は政府の認めたものだけであったが、そうした過酷な状況で、一部の華人華僑（潮汕人）は様々な理由でシャム（タイ）に移住していた。

清の康熙年間になると、福建省や広東省などの沿海部での食糧不足のため、清朝は中国とシャム間の米の貿易を奨励した。そのため、多くの広東省潮州人が赤頭船を使って、広東省汕頭市澄海県の樟林港から出発し、シャム（タイ）に渡っていった（陳 2005）。赤頭船は潮汕地区の華僑華人が海外に行く際に使用する商船である。古代の海のシルクロードを結ぶ重要な手段であり、清朝の潮州と東南アジアの海運で使用する船を指す、船の首が赤色であることから「赤頭船」という名を付けられた[4]。『嘉慶重修大清一統誌』は「澄海県商民領照赴暹羅買米，接濟內地民食，雖行之已閲四十余年，但此項米船，據稱回棹者，不過十之五六」（澄海県商民は政府の呼びかけに応えて、中国大陸の食糧を援助するため、シャムへ米を買いに行った。しかし帰りの船で戻ってくる者は半分もいない）」（野田 1971）と書かれており、多くの澄海県人がシャム（タイ）に滞在し、中国に戻っていないことが明らかになった。

広東省潮州市澄海県華富村出身の鄭信はトンブリー王朝を創造した。鄭信の父は潮汕人の鄭鏞であった。彼の原籍は広東澄海で、雍正年間に漳林港から「赤頭船」に乗ってシャムに来た（黄 2012）。シャム（タイ）に移民して商売を始め、シャム（タイ）人との間に鄭信をもうけた。鄭信はアユタヤ王朝滅亡後、華僑華人を主体とした軍隊を設立し、1766年、ミャンマー軍はシャム（タイ）の首都アユタヤを包囲、攻撃したが、城内の華人住民は勇敢に敵に抵抗し、城を守った。タイの『史料編纂』にも、「約60,000人の中国商人と華人が各要塞に分散して、ミャンマー軍に抵抗した。

4　http://ydyl.people.com.cn/n1/2019/0918/c411837-31359282.html
（最終閲覧日：2022/10/22）

彼らはヨーロッパ人の商店をミャンマー軍への攻撃の拠点としている」と記されている（謝 2004）。その後、鄭信は部下500人の軍人を率いて包囲を突破し、1767年10月に軍隊を率いてアユタヤ城を奪還し、トンブリー王朝を創立してシャムの国家主権を回復した。鄭信とその華僑華人の支持者によって建てられた王朝は、華僑華人がシャムに定住し現地社会に溶け込むという普遍的な傾向を代表している（段 2014：110）。トンブリー王朝が成立した後、鄭信はシャム（タイ）の功績のある華僑華人に重任を委ね、華人華僑に対する優遇政策を実行し、華人華僑に商業貿易特権を与える政策を奨励した。そのような政策の下で潮州人を主とする多くの福建省広東省華人が到来し、シャム（タイ）の華人華僑の数を急速に増加させ、近代中国人のタイ移住の最初の潮流を形成したのである。鄭信によるトンブリー王朝統治はわずか十数年間だったが、多くの華人華僑を呼び込んだ華人政策がタイの華人社会の発展に与えた影響はとても重要である。

鄭信がタイを統治した16年間は中国清朝の乾隆盛世の時期であり、清政府は次第に華人華僑の出国制限を緩和するようになり、中タイ貿易船による移民も緩和されていった。潮州人がシャム（タイ）に大量移民したことも、清政府が1757年に「広州一口通商」を実施し始めたことと関係がある。

その後、タイと福建省、浙江省一帯の貿易活動は禁止された（李 2004）。1781年、鄭信のトンブリー王朝の商人が、再び江蘇省浙江省一帯で貿易に従事する許可を要請したが、清政府はこれを拒否した（庆 1985）。潮州の各関所は広東税関に属しているため、潮州籍華人の潮州に対する貿易は禁止されていなかった。他の税関が閉じられていたため、シャム（タイ）と潮州間の貿易はさらに繁栄しており、貿易船でシャム（タイ）に移住した潮州人は徐々に福建人を超えていった。黄の推計によると、トンブリー王朝時代、華僑華人の数は10万人ほどだった（黄 2008：140）。潮州系華人の増加に伴い、社会的地位と経済力も福建省出身の華人を超えてタイ社会の重要な力となった（黄 2012）。華人華僑の増加に伴い、トンブリー王

朝における華人の居住地と活動範囲もますます拡大していった。トンブリーの対岸にあるバンコク石龍軍路、耀華力路の周辺には、華人が集まる区域が形成された。『潮州志』で「潮人善經商，窶空之子，只身出洋，皮枕氈衾以外無長物。受雇數年，稍稍謀獨立之業，再越數年，幾無不作海外巨賈矣。尤不可及者為商業冒險進行之精神。其贏而入，一遇眼光所達之點，輒番投其資於中，萬一失敗，猶足自立，一旦勝利，倍蓰其贏。而商業上之揮斥乃盈雄」（潮汕人は商売が上手で、頭が良くて。海外で生計を立てて、投資の才覚がある）という記述からは潮州華人の商業の才能がわかる（饶 2005）。こうして、にぎやかな当該地域は商業エリアに発展していった。これが現在のタイにおけるチャイナタウンのルーツである[5]。

トンブリー王朝時代の潮州人を中心とした移民活動は、その後のバンコク王朝において 1 世紀以上にわたって中国人が絶え間なく続くタイへの移民の基礎を築いた。

バンコク王朝では、ラーマ 6 世までの数人の国王が華僑華人を大切にする伝統を引き継いだ。ラーマ 1 世と 2 世は国家貿易を発展させるために人材を求めていた。そのため、清政府が制定した貢使条例や貿易条例に違反していることが分かっていても、華僑華人がシャム商船で密航することを黙認することもあった（陳 2021）。ラーマ 4 世の頃に、シャム（タイ）がイギリスに妥協を迫られて、1855年にイギリスとシャム（タイ）の海外貿易市場を開くためのボーリング条約（Bowring Treaty）を締結した後、シャム（タイ）港が強制的に開かれた。シャム（タイ）貿易はさらに自由化されて対外貿易量は急激に増加し、シャム（タイ）の国内経済は急速に発展した。生計と発展のために、多くの華僑華人がシャムへ（タイ）と移住した。また当時の清朝では「海禁政策」が廃止されて、民間貿易が復興した。第二次アヘン戦争後に、「天津條約」（1858年 6 月13日）により広東省汕頭市は「通商港」として正式に開放され、多くの潮州人がバンコク

5　https://www.baike.com/wikiid/8074828614903458662?view_id=1duv8wgo3wzr40（最終閲覧日：2022/10/19）

に流入した。しかし当時シャム（タイ）に移民した潮州人の多くは食べるに困るほど貧しかった。清末になると、中国東南沿岸部の貧しい人々は自然災害のために飢え、生計のために海外に渡った。そのため、大勢の華人が東南アジアに移民し生計を立てるようになったのである。

四、媽祖信仰のタイでの伝播

東アジア海洋史の研究における媽祖は、近年、東アジアの西側航海地理発見前の朝貢貿易、琉球ネットワーク及び多国籍移民史の議論を引き出している。媽祖信仰圏は東アジアの海洋経済及び社会構造形成の歴史的証明の一つとなった（陳 2021）。

先述のように、清代に中国とシャム（タイ）の民間貿易は急速に発展し、多くの中国人がシャム（タイ）に移民した。19世紀後半にはすでに約150万人の華人がシャムに定住しており、この数は当時の東南アジア華人の約半分を占めていた。1700年から1900年にかけて、華人華僑はシャム（タイ）を最高の海外貿易と移民の地域と見なしていた。華人華僑のタイへの移住に伴い、タイ・バンコクでも媽祖信仰の風習が発展した。中国の民間信仰の媽祖文化が持ち込まれ、現在に至っているのである。

民間信仰とは、超自然な力を持つ精神体（神など）に対する庶民の自発的な崇拝と祭祀を指し、そこには原始宗教の民間での伝播と人為宗教の民間への浸透が含まれている。民間信仰には固定された概念はなく、その信仰を単独で 1 つの概念とする。それが 1 つの宗教信仰に対応して存在することを考慮すると、制度化された宗教と互いに影響しており、この文化体系には信仰、儀式、象徴の 3 つの分離できない体系が含まれている（陳 2009）。

初期にタイに移民した華人華僑は、ほとんどが困窮した農民だった。当時は交通が不便で、船上ではいつでも危険にさらされていたため、神に希望を託す他にない。媽祖は中国沿岸部の航海神としてこれらの農民たちに

より船に祀られ、航海の無事が祈念されていた。未知の土地に向かうには信仰の力が重要であった。一方で、華人華僑がタイで生存し発展するには、中国からもたらされた伝統文化をタイの現地文化に溶け込ませなければならなかった。民間信仰は中国の伝統文化の重要な一部であるため、華人華僑の発展によってタイの宗教体系と融合していくのは必然であった（龚 2010）。タイの伝統宗教はすでに媽祖信仰と一体化しており、媽祖に関する神話や伝説もタイの文献に記載されている。陳棠花の『泰文典籍媽祖神話』は、タイ語で『ナラヤナ（Narayana）10世書』に基づいて1923年に発表されたが、その中で、媽祖が諸神を召集してエビとハゼを罰して中国人に海難から救ったという伝説について記している。

媽祖信仰に内包された感情と伝承は中華民族感情を伝え、団結を増進し、社会発展を維持するための重要な精神的手段でもある。媽祖信仰は中国人の民間信仰であるが、タイの在来信仰とも結合しており、多くのタイ人も媽祖の信者になっている。バンコク市内には7つの代表的な媽祖廟がある。バンコク華僑華人の民間信仰の主な文化的媒体は中国式寺院である。中国式の寺院に祀られている中国の民間信仰の神は主に媽祖、関聖帝君、本頭公、観音、斉天大聖などで仏教と道教の神である。タイには潮汕人が多いため潮汕の民間信仰はタイで非常に広がっており、タイに媽祖廟が多いのはそのためである。

五、タイ・バンコク市内三媽祖廟調査

１）七聖媽廟

場所：216/4 Charoen Krung 43 Alley, Khwaeng Si Phraya, Khet Bang Rak, Krung Thep Maha Nakhon 10500 Thailand

媽祖信仰は、華人の信仰であるばかりでなく、タイの信仰と融合しており、多くのタイの人々も媽祖の信者である。タイの媽祖には「七聖母」という特別な呼び名がある。なぜ「七聖母」と呼ばれているのか。中国中山

大学の段立生の考証によると、「中国潮汕人は媽祖を七聖母と呼んでいるが、おそらく彼女の家族には男 1 人、女 6 人の兄妹 7 人がおり、林黙娘が一番小さかったので、七聖媽と呼ばれているのだろう」（段 1996）。四丕耶七聖母廟の入り口にある「七顕功高福沢国」、「聖施徳厚保啓民」の木製対聯は非常に目立ち、有名である。

（「七聖媽廟」入口、2022 年 8 月 29 日筆者撮影）

（「七顕功高福沢国」「聖施徳厚保啓民」の木製対聯、2022 年 8 月 29 日筆者撮影）

この廟には７種類の媽祖像が祀られており、観音、関羽、福徳伯公、福徳伯母など中国神も祀られている。タイの首都バンコクには７つの代表的な媽祖廟がある。その中の１つが上述の実地調査した七聖廟であり、廟の入口にある「七顕功高福沢国、聖施徳厚保啓民」から、その名の由来を知ることができた。廟内に現存する「威霊顕赫」の木額の題款年代から、この廟は最も遅くとも咸豊元年（1851）に建てられたことがわかる。最初は海南籍の華人が建てたが、今はタイ人が信奉する専用廟である。七聖媽廟の継承方法は祖先制によって代々伝えられており、伝承時には性別に関係なく女性も伝承できる（段 1996）。七聖媽廟は媽祖を祀ることを主とし、中華の伝統文化を発展させている。参拝者は主に近くに住んでいる華僑華人であり、現地の華僑華人の精神的需要を満たしている。七聖媽廟の海外華人の集会には２つの形式がある。１つは定期的なもので、１つは臨時のものである。前者はレジャーや娯楽を主とし、同時に情報交流の場を兼ねている。後者は突発的な出来事に応じるものである。親族の急死、子供の進学など、人々が七聖廟に集まり、さまざまなことを協議し協力する。七聖媽廟は、媽祖を祀っているだけでなく、そこに集まって講義を行うな

（７種類の媽祖像、および財神など中国の神様）

ど、廟を教学の場所として伝統的な中国文化を伝授することもある（段 1996）。

残念なことに、ここの管理者は歯がなく話すことができず、あまり字を書くこともできなかったため、取材することができなかった。

2）本頭媽廟

場所：164/1 Charoen Krung Rd, Yan Nawa, Sathon, Bangkok 10120 Thailand

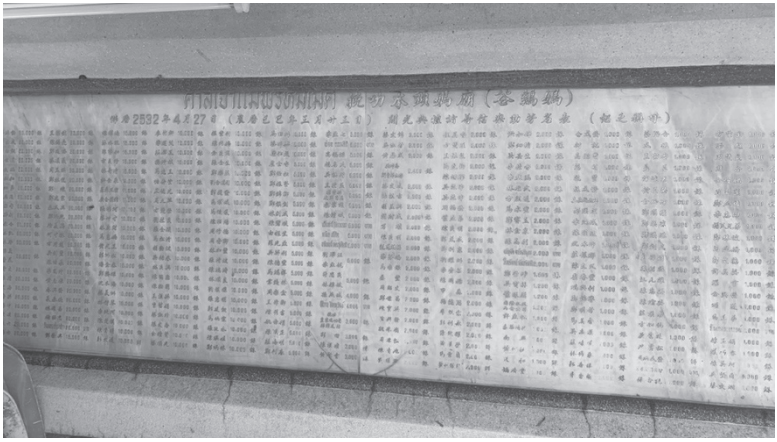
本頭公は潮汕地域特有の民族信仰である。だが、タイ伝播の起源については、まだ具体的な文献は見つかっていない。しかしタイの本頭公廟では、本頭公はしばしば媽祖と一緒に祀られている。本頭媽廟はもともと川辺にあったもので、1861年に建てられ、200年以上の歴史がある。1989年に鄭皇橋の建設のために撤去されたが、バンコク市に申請し現在の住所を取得し、再建された（段 1996：105）。地元の華人華僑が寄付して建てたもので、入り口の石碑には寄付者の名前が刻まれている。

本頭媽廟に入ると、左右にそれぞれ本頭公母が、中央には天后聖母が祀られていた。

廟の管理者によると、本人は守衛を務める4代目で、祖父母は広東からタイに来ており、広東語が少し話せる。新型コロナのせいで参拝者が全く

（「本頭媽廟」の入口、2022年7月30日筆者撮影）

（「左：本頭公、中央：媽祖、右：本頭母」、2022年7月30日筆者撮影）



（「寄付者の名前」、2022年7月30日筆者撮影）

いなくなり、今も以前ほどには戻っていない。参拝客は華人華僑だけでなく、タイ人も多い。しかし、参拝者は本頭公媽のためだけに訪れるのではなく、多くのタイ人は関羽を信仰しており、人が死んだら関羽が死体を引き取りに来る、と考えているそうである。この廟は同郷会と華人華僑の寄付金で運営している。

3）Mazu Shrine Lhong 1919

場所：PGM5+H2G, Chiang Mai Rd, Khlong San, Bangkok 10600 thailand

（「MazuShrine Lhong 1919の入口」、2022年8月29日筆者撮影）

伝統的な媽祖廟だけではなく、バンコクでは倉庫を改造した媽祖廟も発見した。バンコクの中心地を流れるチャオプラヤ川はタイで一番大きな川で、19世紀には蒸気船が盛んで、この川はタイと世界各地との貿易に便利を提供した。「Mazu Shrine Lhong 1919」はそのチャオプラヤ川の対岸に建てられている。1850年に建てられた中国三合院スタイルの埠頭貨物倉庫―「Huang Chung Lhong」で、歴史は古く、中タイ文化が融合した文化的基礎を持っている[6]。「Lhong」はタイ語で船着場という意味である。つまり、ここは中国とタイの貿易の船着場であった。取材により、このHuang Chung Lhong（船着場）は172年前にタイでビジネスをしていた広東省潮汕人 Phraya Phisansupapon が建てた港であることがわかった。1850年、Phraya Phisansupapon は Huang Chung Lhong（船着場）を創設し、中国の媽祖像を3体持ってきて、Huang Chung Lhong の倉庫に媽祖廟を建

6　https://visionthai.net/zh-hans/article/lhong-1919-saran-wanglee/
（最終閲覧：2022/10/21）

て、タイに来て貿易をしている中国人に媽祖を祀る場所を提供した。1855年、「ボーリン条約」を通じてタイは新たな輸出入制度を確立し、シャムのコメ輸出は急激に増加した。

1850年代から1930年代にかけて、タイのコメの年間平均輸出量は99万担から1572万担というように約16倍に増えた（王 1998）。米業の発展は、精米業をタイの最も重要な工業の一つにした。1871年、Phraya Phisansupapon の隣人の Wanglee という中国人商人がこの港に来て、米の取引を始めた。その後、埠頭の近くに米坊を開き、港のそばに土地を買った。1919年に Wanglee 一族は、Phraya Phisansupapon から Huang Chung Lhong と建物を購入し、記念のために「廊1919」と命名した。Huang Chung Lhong は媽祖廟とともに Wanglee の一族の所有となり引き継がれた。現在、Wanglee 一族は 6 代目になっている。2016年、一族は Wanglang 港の処置について議論した。2017年11月、1 年間の改修を経て、「Mazu Shrine Lhong 1919」が正式に一般公開された。現在、「Mazu Shrine Lhong 1919」はタイの有名な多目的文化観光地である（陳 2021）。一階の参拝区域は Lhong の中心区域であり、参拝者やおみくじを引く人などが多く、伝統的な中華の雰囲気が濃厚である。場所の配置も中国の伝統的寺院と一致している。3 体の媽祖の像は、中央のものが門に向かっている。この 3 体の媽祖像は媽祖信仰の 3 つの時期を示しており、それぞれ、航海の安全を保障する林黙娘、企業と個人に幸運をもたらす海神媽祖、善良で思いやりに満ちた天上聖母である。媽祖が人から神に羽化する過程が記録されている。

廟の一階に媽祖像（画像）の前の台案には、タイの寺院のものとよく似た花と香炉が並んでいる。5 つの香炉の内、中央の香炉は両側の 4 つより大きく、それぞれの香炉には 3 本の線香があり、2 つの茶碗が置かれている。地面には赤い革蒲団が 3 枚並んでいて、その上にはおみくじが置いてある。

廟の二階は「聚宝堂」という部屋で、三体の媽祖像の本体が祀られてい

（「媽祖祭祀区」（廟の一階）、2022年8月29日筆者撮影）

る。一階のものと香炉、お花、線香、茶碗などの配置はほぼ同じである。この三体の媽祖像は似ているが、服装が違う。媽祖像の前には三体の財神爺も祀られている。壁には晩清の洋務運動推進者の一員の張之洞が書いた「恵此中国」の額が掛けられており、言ってみればWanglee一族の中タイ両国への積極的な友好貢献が肯定されているのである。

もちろんここには観光客が多く、特にシンガポールやマレーシアから来た華僑が多かった。意外にもタイの若者の観光客も多かった。媽祖は彼らに幸運をもたらすと信じられており、彼らは媽祖信仰を伝承していきたいと考えている。Mazu Shrine Lhong 1919の影響は、中国の媽祖信仰やバンコクの華人埠頭文化をより多くの人に知ってもらうことである。だが、観光だけに来て、参拝しなくてもいい。Mazu Shrine Lhong 1919には媽祖祭祀区域のほかにも、博物館や喫茶店などがあり、観光客は廟でのんびり観光できるし、Mazu Shrine Lhong 1919の施設を通じて当時華僑華人の媽祖信仰と華人の埠頭文化を知ることもできるだろう。

（「聚宝堂」（廟の二階）、2022年8月29日筆者撮影）

まとめ

媽祖への礼拝を通じて、人は媽祖との結びつきの感情を体現する。「海のあるところには華人がいて、華人のいるところには媽祖信仰がある」と言われている。媽祖信仰は華人の移民によって海外に伝播した。媽祖文化

はどうやって世界に伝播したのか。なぜ媽祖が華人華僑と祖国との精神的架橋であるのか。媽祖文化が分布する国の状況や影響はどのようなものか。これらの諸問題を研究するには、グローバルな視野を身につけなければならない、国際的な文化研究を背景に、国境を越えて認識を持たなければならない。

媽祖信仰の伝播に伴って、大きく異なる文化的背景の下で、世界各地で分香（分霊）の形で媽祖廟が建設された。海外、香港、マカオ、台湾の媽祖廟では、福建省湄洲島の媽祖廟に線香が上げられている。これは媽祖信仰が地域を越えて、人類の「海峡平和の女神」になったことを意味している。

三つの廟に対するインタビュー調査と資料により、三教一致論（三教とは中国では儒教、仏教、道教をいう）を確認することができた。そのことから、中国の民間寺院では三教の神を同じ廟に祀ることが多いが、この伝統的な方法は華人華僑によってタイにも持ち込まれていた。タイの華僑華人の媽祖信仰にもこのような中国の宗教の特色が反映している。媽祖信仰はタイの華人華僑と現地の人々の交流を促進し、タイ現地の経済発展に積極的な貢献をしており、世界中の華人華僑とのコミュニケーションをつなげていることがわかった。

今回の調査では、媽祖信仰のタイでの変容過程については明らかにならなかったため、今後の課題としたい。

参考文献

松尾恒一（2021）「媽祖・観音・マリア―近世長崎における清国海商とかくれキリシタン―」、『神仏融合の東アジア』、pp. 411–452。

菊地章太（2017）「民間信仰と仏教の融合―東アジアにおける媽祖崇拝の拡大をたどる―」、『東アジア仏教学術論集』（5）、pp. 29–56。

中村実央（2021）「媽祖信仰の内陸への伝播と変容――清代四川省中東部を事例として」、『社会システム2021』（24）、京都大学大学院人間・環境学研究科　社会システム研究刊行会、pp. 325–338。

高橋誠一（2009）「日本における天妃信仰の展開とその歴史地理学的側面」、『東アジア文化交渉研究』（2）、pp. 121–144。
王燕萍（2020）「宋代における媽祖信仰の実像」、『都市文化研究』（22）、pp. 24–38。
鄭星瑶（2020）「現代中国人の宗教意識・宗教的実践―福建省莆田市における聞き取り調査およびアンケート調査から―」、『京都文教文化人類学研究』（13）、pp. 1–223。
矢澤知行（2014）「中国・台湾の媽祖巡礼―その成立・展開・現状について―」、『2014年度四国遍路と世界の巡礼　公開講演会・研究集会プロシーディングズ』、愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2015。
鄭和（明）『天妃之神靈應記』、載蔣維錟、鄭麗航（2007）『媽祖文獻史料匯編』第一輯、碑記卷、中國檔案出版社、p. 45。
李恩涵（2015）『东南亚华人史』、东方出版社、p. 273。
赵红英（2017）『华侨史概要』、中国华侨出版社、p. 62。
柳貫（元）『敕賜天妃廟新祭器記』、蒋维锬 / 郑丽航编（2007）『妈祖文献史料汇编』第一輯、碑記卷、中国档案出版社。
邹启宇（1985）「中泰关系史简述」、『东南亚』（2）、pp. 1–12。
陈训先（2005）「清代潮帮侨批业对我国原始金融市场的贡献」、『汕头大学学报』（5）、pp. 81–83。
黄素芳（2012）「吞武里王朝时期的泰国华人社会及其特点」、『广东工业大学学报』（6）、pp. 72–76。
饶宗颐（2005）『潮州志』、潮州市地方志办公室出版、p. 2952。
陈笛（2021）「泰国曼谷地区华侨华人妈祖信俗与中华文化认同研究」、湖北民族大学、pp. 1–89。
滨下武志（日）（2009）、『中国，东亚与全球经济——区域历史的视角』、社会科学文献出版社、p. 275。
陈旭霞（2009）『中国民俗风情丛书：民间信仰』、河北人民出版社、p. 31。
龚益波（2008）「泰国华侨华人民间信仰的特点及其前景」、『东南亚之窗』（01）、pp. 52–60。
段立生（1996）『泰国的中式寺庙』、泰国大同社出版有限公司、p. 90。
段立生（2014）『泰国通史』、上海社会科学院出版社、p. 67。
王苍柏（1998）「东亚现代化视野中的华人经济网络——以泰国为例的研究」、『华侨华人历史研究』（09）、pp. 8–27。
妈祖信俗
https://www.ihchina.cn/mazuxinsu.html（引用日：2022/10/21）
曼谷廊1919（LHONG 1919）百年火船廊转型文创景点专访 Saran Wanglee
https://visionthai.net/zh-hans/article/lhong-1919-saran-wanglee/（引用日：2022/10/21）
泰国华人
https://www.baike.com/wikiid/8074828614903458662?view_id=1duv8wgo3wzr40

（引用日：2022/10/19）
让“红头船”扬帆在大湾区上
http://ydyl.people.com.cn/n1/2019/0918/c411837-31359282.html（引用日：2022/10/22）
天上賜福臨社稷　聖母慈祐保安民　台灣人的母親「媽祖婆」
https://www.setn.com/News.aspx?NewsID=626375（引用日：2022/10/22）
妈祖信仰体现中华民族传统美德
http://www.ptwhw.com/?post=13842（引用日：2022/10/22）